



UNIV. OF
TSUKUBA FC

SHUKYU CONNECTED #01

「諦めが悪い」私の仕事

22期

多田 寛

佐賀県まれ。県立小倉高校出身。東京ヴェルディ広報部で活躍後、現在は日本サッカー協会フットボール本部チームコミュニケーション部部長を担当。



筑波大学蹴球部は高等師範学校を起源とし、1896年から数えて129年の伝統を誇ります。「ゴールポストを全国に」を合言葉に多くのOBが教員となりサッカーを普及してきた歴史があります。蹴球部OBには田嶋幸三さん、井原正巳さん、最近では三笥さんなどがいらっしゃり日本サッカー界を引っ張ってきました。サッカー業界以外にも他業界で活躍しているOBが多々いらっしゃいます。

SHUKYU CONECTEDはそんな様々なOBにインタビューを行い記事にすることで、現役部員がOBを、OBが他のOBを知る機会を増やし交流を促進させることが目的です。この記事を作成するにあたり多くのOBの活躍を知りました。それを少しでも知っていただけると幸いです。

第1回は日本サッカー協会広報部長として活躍されている多田寛さんです。森保監督、代表選手を支える多田さんは「好き」を仕事にされました。そのような多田さんの発言からは多くの気づきを得られました。この記事は、なるべく多田さんの言葉を崩さず使用しています。記事の向こう側に多田さんがいると思って読んでみてください。

今の仕事に至るまでの経緯をお教えてください

ー筑波に入ったのが九十五年。四年で卒業するつもりでしたが、就職活動がうまくいかずに一年留年。五年生になっても内定が取れなくて、親にも愛想尽かされて。もともとは先生になって、自分の高校に戻ってサッカー部を指導したい夢もありましたが、あまりにもちゃらんぽらんでした。それに、こんなやつが先生になっても生徒のためにならないなと思い、それはやめました。

サッカーには関わりたくて、じゃあどうしようとなったときに、マスコミの道を考えました。マスコミに行ってサッカーの担当をやりたいと思ってたので、サッカーに関わる仕事以外はありませんでした。しかし、全部落ちて、最後は東京に行けば何かあるかもしれないと思い、東京でフリーターをしながら

らチャンスを待っていました。

そんなとき、筑波のOBが紹介してくれた都リーグのチームに参加して、そこで知的障害者サッカー教室の手伝いをしたのがきっかけ。たまたまそこに来ていた東京ヴェルディ（当時ヴェルディ川崎）のフロントの方と話をして、後日「その気持ち、まだある？」と電話をもらい、即答で「あります」と答えました。それが二〇〇〇年十二月のことでした。

そこから十二年間、ヴェルディで広報と営業、ホームタウン活動を行い、様々な経験をさせてもらいました。そのあと、日本サッカー協会に声をかけていただき、代表チームの広報としてロシア大会の立ち上げからカール大会まで8年間やらせてもらいました。

広報という仕事の内容について教えてください。

「現場の広報は、練習にメディアが来たときの対応から、試合後の記者会見、監督や選手の取材調整などをやる。現場に帯同するので、選手やスタッフと一緒に移動し、同じ空気を味わいます。広報もいろいろありまして、クラブだと社会貢献活動の情報を発信するような広報もあれば、チームに帯同してチームのことをやるチーム広報もあります。」

自分はクラブでずっとチーム広報をやっていたので、毎日現場に行きました。メディア対応、監督や選手のコメントを取って渡す、試合が終わったら記者会見のアテンドをし、そのあとホームページに記事を書く、そんな日々を送っていた。日本代表でも基本的には同じで、試合が終わったあとにテレビで監督や選手のインタビューが流れますが、その裏で「この選手でお願いします」とテレビ局の依頼を調整して、選手を連れてくるのが自分の役割です。インタビューが終わったら、今度はミックスゾーンという、記者の方たちが選手を取材するエリアに選手を連れて行き、そこでも対応してもらいます。そのようなメディアと選手、監督の間に立って調整をする仕事です。代表活動がないときは、監督の視察に同行し、そのときにメディアから

「コメントもらえませんか？」と依頼が来たら、その場を作るのが自分の仕事です。また、新聞や雑誌に載る監督や選手のインタビューも、調整をする。試合会場に行けば、自分たちはそのクラブの間ではないので、クラブ広報とも調整をする必要があります。迷惑をかけないように、でもメディア対応はする。」



広報という仕事のやりがいについて教えてください。

「やりがい？ やはり、選手たちがどんどん成長していく姿を間近で見られることです。最初は「自分のこと」しか話さなかった選手が、やがて「チームのこと」「サポーターのこと」さらには「日本のこと」まで考えて話すようになって。その変化を一番近くで見えました。それは広報として本当に幸せなことだと思います。負けたときにどう振る舞うかは個人的にすごく大事だと思っていて、落ち込んでる選手たちに「それでも伝えるべき言葉がある」と話をし、取材に出てもらうこともありえます。そのようなときに、しっかり耳を傾けてもらえる関係を作る必要がある。

一方で、メディアとの関係づくりも大事です。単に情報を渡すだけではなくて、その人たちと一緒に、どうやったらサッカーをもっと良く伝えられるかを考えます。毎回の取材調整にも「この選手の声を届けたい」「今はこの話をした方がいい」という判断が生まれてくる。

広報は地味ですが、チームの顔をどう社会に見せるかを決める仕事でもあります。



蹴球部時代の思い出はありますか？

「私の学年で言えば、私が入学する前まではずっと筑波は優勝を重ねてきていました。しかし、私たちの四年間だけはノンタイトルで、一つもタイトルを取れませんでした。その後、私の一個下からまたタイトルを取り続けるようになりしました。ちょうど私の四年間は何も成し遂げてない代で、そこにコンプレックスがあります。だから、あまり筑波学学蹴球部というのを前に出したくないというのが本音です。他の代はみんな優勝を経験しているし、重なっていない代の先輩と話するときも、気まずさを感じました。△チームでもなかったですし、胸張って「筑波大蹴球部です」ってそもそも言える立場になり。」

思い出といえば、当時の時代ですね。自分が二年生のときに、二十八年ぶりにオリンピック出場が決まり、翌年には初めてワールドカップ出場が決まりました。四年生のときにはフランス大会があったりしました。『リーグも九十三年に始まり、あの頃が一番熱量があったと思います。そういう試合を、同級生たちと集まってわいわい騒ぎながら見ていたのが、一番の思い出かもしれません。』



後輩へのメッセージをお願いいたします。

ー多分みんな、何かしら思いを持って筑波大蹴球部に入っていると
思います。地元に戻って、サッカーを子どもたちに教えた
いというのもあるかもしれません
んし、それこそマネジメントを
勉強して、スポーツビジネスに
入ってやってみたい、チャレン
ジしたいと思っている人もいる
かもしれません。

自分の実体験からアドバイス
できるとすれば、諦めなければ
形にはなるということです。私
は四年で卒業したみんなとは二
年ほど遅れて、社会に出ること
になりました。諦め悪く、諦め
きれずに求め続けた結果、今の
ような仕事に就くことができた
というのもあると思います。逆
にその諦めなかったことが形に
なったとも言えます。

そういった意味ではやりたい
ことがあるのであれば、それに
こだわって、どうやったらそこ
にたどり着けるかというのを模
索し続けるのも、ひとつのやり
方だと思います。

志を持っている方がたくさん
いると思うので、諦めないでほ
しいです。選手かもしれません
し、指導者かもしれません。あ
るいは僕らみたいな事務方、興
味ある方はどれぐらいいるかわ
かりませんが。こういった道
であっても、山の登り方はたく
さんあると思うので、様々なこ
とにチャレンジして、自分のつ
かみたい夢をつかんでくださ
い。

